



大学連携推進協議会とは

大学連携推進協議会は、南あわじ市内の大学等高等教育機関と総合的かつ包括的に連携を図り、6次産業化の推進と地域連携を促進するため設置されています。

地域の課題解決のための研究会

1 地域植物資源研究会

南あわじ市のブランド商品であるタマネギやレタスは、近年の異常気象、後継者不足等のため、栽培面積が減少傾向にあります。研究会では栽培環境に適合し、かつ消費者が求める多様な作目の探索を行います。また植物工場を利用して、これまで栽培が難しかった作物の栽培技術の構築を目指します。

2 地域ブランド食品研究会

深刻化するイノシシやシカによる農作物被害を逆手に取り、捕獲したイノシシやシカをジビエとして利活用し、新たな観光資源とすることを研究します。また、農畜水産物の様々な特産物を用いた新しい醸造食品の研究開発を行います。

3 地域資源保全研究会

管理放棄が増加している里山に新しい価値観を構築し、里山の管理方法の開発を研究します。
 野生動物と人との棲み分けを図るバッファゾーンによる獣害対策を実施し、その効果検証を行います。

4 地域海洋資源研究会

南あわじ市で養殖加工が盛んに行われているワカメ以外に、海藻類、貝類、ウニ、ナマコ、タコなどの無脊椎動物について養殖の可能性を探り、養殖技術の開発を行います。地域の伝統ある海産物の製造方法について、科学的有利性の検証及び伝承方法を検討します。

協議会総会で発表 農学部醸造学科 4年生 大場 沙織さん

令和4年度南あわじ市大学連携推進協議会総会が開催(令和4年8月5日)され、農学部醸造学科4年生 大場 沙織さんが「天然の香り成分がもたらす微生物への影響について」と題して発表を行いました。協議会は、吉備国際大学農学部長をはじめ、志知キャンパスがある志知地区の住民代表、市内の有識者や大学関係者で構成されており、微生物の活力を高める方法に関して、多くの意見交換がなされました。



協議会総会で発表する大場さん



ラッピングバス

農学部のある南あわじ志知キャンパスは、生活やレジャーに便利な位置にあり、神戸市、明石市、姫路市、加古川市、大阪府、徳島県などから通学する学生もいます。一人暮らしの学生も休みの日には、気軽に京阪神や徳島へ出かけることができます。学生が利用する高速バスは、農学部の学生に限り、最寄りのバス停「陸の港西淡」から「神戸三ノ宮」までの区間が特別料金で乗車できます。

そんな学生が頼りにする高速バスに、農学部のカラーに彩られたラッピングバスが登場しました。

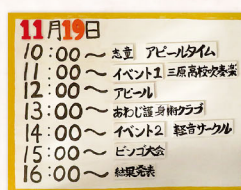


学生インタビュー 農学部醸造学科 2年生 中田 佐和さん

コロナ禍で中止が続いていた、吉備国際大学南あわじ志知キャンパスの学園祭“くにうみ祭”が3年ぶりに開催されました。当日は晴天にも恵まれ、さわやかな秋空のもと志知キャンパスは、様々な催しを楽しむ学生や市民で賑わいました。

“くにうみ祭”は、学生が主体となって実施する市民参加型イベントで、学生が出店する模擬店のほか、南あわじ市内の小学生や高校生の舞台発表も行われました。ほとんどの学生にとって初めての学園祭は、学生時代の貴重な思い出になったようです。

今回は、実行委員会の委員長 醸造学科2年生 中田佐和さんにお話を伺いました。



Q “くにうみ祭”が終わりましたが、率直な感想を聞かせてください。

中田 とても疲れましたが、楽しかったです。夏休みが終わって、“くにうみ祭”まであっという間に過ぎ、当日を無事に迎えて本当に良かったと思います。実行委員のメンバーが力を出し切って、頑張ってくれたおかげです。

Q 3年ぶりの開催で戸惑うことも多かったのではないですか。

中田 唯一“くにうみ祭”を経験している4年生も、当時は1年生だったこともあり、“くにうみ祭”の事をあまり覚えていません。引き継ぎ資料もコロナ前のもので参考にできるところが少なかったため、自分たちで模索しながら進めていきました。

Q 今年のテーマ「Reborn～新しいことに挑戦する～」に込められた思いは何ですか。

中田 テーマは実行委員会のメンバーで相談して決めました。3年前の“くにうみ祭”のことが分からない中、実行委員やそれぞれのサークルが新しいことに挑戦しようという思いがありました。イベントも自分たちで考え直し、これまでとは違う学園祭になったと思います。“くにうみ祭”は復活したけれど、新しい“くにうみ祭”になりました。

個人的には、実行委員会の委員長を務めることが、私自身の挑戦でもありました。

Q 吉備国際大学農学部らしい模擬店がたくさんあったように思いますか。

中田 そうですね。私も所属している食品機能研究サークルは、もともと酒粕サークルで、他と統合して今のサークルになっています。酒粕でクリームパンを作ったり甘酒を作ったりして活動しています。模擬店では「粕汁」を出していました。他は狩猟部のシカ肉の串焼きや発酵サークルのジビエ肉カレーパン、有志でピザや焼き鳥もありました。各サーク

ルが模擬店を出店し、来場される方々に楽しんでもらえるように工夫していました。

Q 実行委員を共に経験した仲間たちとの関係はどうでしたか。

中田 実行委員は6人のメンバーがいます。私は、昨年1年生の時に“くにうみ祭”の代わりに実施された交流会のお手伝いをした経験から、先輩に声をかけられ、今年の“くにうみ祭”の実行委員会委員長になりました。6人は企画部長や装飾部長など役割を持っていて、実行委員のメンバーそれぞれが頑張りました。メンバー同士の連携が上手いかず悩んだ時もあったけれど、意見を言い合える関係になっていきました。もちろん、実行委員でない模擬店を出してくれた学生も、ステージでライブしてくれた学生も、皆それぞれが頑張りました。“くにうみ祭”の復活が成功したのも私の力ではなく、皆のおかげです。

Q “くにうみ祭”の特長として地域連携があります。和太鼓(志童)や淡路三原高校の吹奏楽部の出演、淡路島牛乳株式会社の参画もありました。地域は農学部の学生を応援していると感じますが、何か地域の人に伝えたいことはありますか。

中田 地域に恩返しをしていきたい。協賛していただいた方々の中には、多くの学生のアルバイト先もあります。私がお世話になっているアルバイト先からも協賛をいただき、当日の“くにうみ祭”にも来てくれました。とても嬉しく思います。

Q 来年の“くにうみ祭”に向けて、後輩に伝えることはありますか。

中田 すでに来年の実行委員をやりたいと言ってくれる学生もいます。やらなければならないことはたくさんあるけれど、メンバー同士情報共有し、楽しみながら進めてほしいです。

Q 色々な苦勞もあったと思いますが、“くにうみ祭”は楽しめましたか。

中田 はい(笑)。今は安堵しています。

令和5年4月 農学部 海洋水産生物学科 新設!



連携協力協定調印式の様子

吉備国際大学南あわじ志知キャンパスに、農学部海洋水産生物学科が新設されます。これにより、農学部醸造学科は学生の募集が停止され、醸造学科で行っていた教育・研究等については、引き続き農学部地域創成農学科で行われることとなります。海洋水産生物学科では、伝統的漁業や先端的な養殖、水産食品製造の専門知識や技術の習得をはじめ、水族館や海上レジャーなど海洋生物資源を利用した産業について学び、新たな産業を創出するなどの人材育成を図ります。水生生物学、水産増養殖、水産食品学、水産食品学実習、水圏フィールド実習などが主なカリキュラムとなっています。

取得できる資格：食品衛生管理者(国家資格)、食品衛生監視員(任用資格)、学芸員(国家資格)

海洋水産生物学科が新設され、淡路島の地で漁業の6次産業化について専門的な教育研究を進めていくため、吉備国際大学を運営する順正学園と南あわじ漁業協同組合は、連携協力協定を締結しました。連携協力協定は、相互の資源の交流・活用を図り人材育成、地域課題の解決、産業振興、まちづくり等の分野において連携・協力し将来にわたる双方の発展に寄与することを目的としています。今後は、淡路島における漁業・水産業の抱える様々な問題に対し、南あわじ漁業協同組合と吉備国際大学が共に協力してお互いの強みを活かしながら解決していくための方策を模索していきます。



地域創成生涯学習講座

新型コロナウイルス感染症拡大防止のため開催を自粛していた「地域創成生涯学習講座」が、3年ぶりに開講されました。規模を縮小しての実施となりましたが、「地域創成の方法と実践」をテーマに全4回の講義が行われました。すべての講義を受講した熱心な市民もいて、生涯学習のよい機会となりました。



第1回「人口減少社会における地域創成を考える」 末吉 秀二 教授



第2回「GISを使って地域の情報を地図化する」 森野 真理 教授



第3回「現地調査で聞いてきた、沖縄の郷友会」 平井 順 准教授



第4回「地域農業の担い手を考える」 濱島 敦博 准教授